

現代行徳地域史の課題

竹内 壮一

この小論は現代市川市の中でもっとも変化の激しかった行徳地域の現代史を考えるための「課題」として、行徳地域変容の起点となった京葉港市川1期埋立計画とそれに連動する土地区画整理事業を地域形成の選択という視点で整理したものである。その際、現在の行徳地域の姿ではない別の「もう一つの行徳」を検討することで現代行徳地域史の「課題」を提起することにある。

1. 京葉港市川1期埋立計画

行徳地域の姿が大きく変わるのには、地先海岸の埋立が引き金になっているので、まず京葉港市川1期埋立計画（市川1期計画）について簡単に述べておく。

市川1期計画は県の京葉港計画の一部分をなすが、その対象地域は、すでに市川市が市独自の埋立計画として立案していた地域でもあった。

市川市は1965年第3次埋立計画（189ha）を立てたが、実際に市川市に埋立の免許が下りたのは東浜（17ha）と沖場（4ha）の埋立だけであった。その主な理由は、市川市の第3次埋立計画区域が船橋市・習志野市・市川市にまたがる広大な京葉港計画に含まれているため、県は市川市単独での埋立計画には応じなかったためである。

行徳地域の埋立計画については千葉県が京葉臨海工業地帯造成計画の一環として京葉工業地帯の西の拠点となる京葉港の建設計画を進めていた。東京湾内の港湾貨物の増大に対応するための港湾の拡充・整備を目的としたものであった。このため京葉港全体としては1,924haの埋立てを行い、港湾施設を始めとして、工業、住宅、さらには道路、鉄道、流通業務用地等公共施設の整備を行う大規模な埋立計画であった。

このなかで行徳地先の172ha（52万坪）については湾岸道路、臨海鉄道を整備する計画であり、湾岸道路は新東京国際空港と都心を結ぶ重要道路として、また千葉、東京間の幹線道路として首都圏需要に応ずるための道路として位置づけられていた。

県はこのような計画を持っていたが、一方で市川地区の埋立計画については次のような認識も持っていた。